ユスト高山右近の生涯と信仰 ⑩

長崎、そして家康の決断

ユスト高山右近一行が長崎に到着したのは、慶長19(1614)年の4月中旬のことでした。

現在、長崎市を訪問すると、トードス・オス・サントス教会跡（現在は春徳寺）をはじめ、ミゼリコルディア(慈悲の組)本部跡石碑、長崎銀行本店近くにあったサンチャゴ病院、長崎県庁にあるイエズス会本部碑など、右近の足跡をたどることができます。

大坂から護送されてきた右近たちを引き受けた長崎奉行は、トードス・オス・サントス教会近くの鳥ノ羽屋敷と呼ばれる家を宿泊所として与えました。ひと月前から国外追放のために全国から集められた宣教師たちで、教会の施設はどこも満員だったからです。

この時点では、右近たちは今後の処遇について何も知らされていませんでした。それでも、最後の準備のために毎日、静かな祈りの時を過ごしていました。霊的指導司祭であったペドロ・モレホン神父の指導で「イグナチオの霊操」に与かり、黙想のうちに、高槻から始まって、教会の春、追放の冬、自身の半生を振り返りつつ、間もなく迎えるだろう殉教に向けて、心の準備を整えたのでした。

その後も、生涯の総告解を受け、毎日ミサに与かり静かな祈りの時を過ごしました。また、体調のよい時には、ミゼリコルディアの福祉活動に参加し、自身の病や老いを忘れて、貧しい人たちの友となりました。また、家族とともにサンチャゴ病院に出向いて、病者に献身的な看護を行いました。

しかし、長崎の右近たちを巡る情勢は右近の想いとは別に、目まぐるしく動いていたのです。右近を巡るいくつかの動きをまとめてみましょう。

長崎に右近が到着したと聞いた各地の大名は、使者を送って右近を慰問させました。また、親しい友人が右近を訪ね、家康にとりなそうと申し出ました。それに対して、右近は心の中で信仰のためにいつでも命をささげられるようにと願いつつ、今の境遇を変えることを望まないと答えました。右近の友人の一人、細川忠興(ただおき)は「右近はこの不当な追放を甘んじて受けることにより、その英雄的な生涯に冠をいただくことになった」と言いました。右近は追放される前、忠興に感謝の書状を送っています。

この頃、関ヶ原の戦いで勝利を納め実権を握り、徳川家を頂点とする長期的な政権を樹立しようとする家康と、徳川家の主君筋にあたり別格的存在になっている豊臣家との対立が次第に激しくなっていました。両陣営が来るべき戦いに臨む準備として軍備を増強する中、ヨーロッパからの武器調達のためにそれぞれがキリスト教関係者に接触していました。

そしてまた、忠誠の人であり、領民の人望も厚く、戦い上手で築城の名手でもある右近の動きにも注目していたのです。

右近が金沢を出発し、琵琶湖湖畔坂本にとどまっていた時、豊臣秀頼の使者が右近を大坂城に迎えるべく訪ねてきましたが、すでに右近は坂本を発った後でした。同じ使者は長崎にも派遣されましたが、その時も右近がマニラに向けて出発した二、三日後に到着したのでした。豊臣側には数名のパードレ(神父)がかくまわれており、キリシタン大名も数多く参加していました。したがって「教会の柱石」「伴天連(ばてれん)の大旦那」である右近を味方につけようとしたのではないかと考えられます。

また、金沢から長崎へと旅する右近一行を監視するかのように、刺客が目を光らせていました。長崎到着後も右近の近くに潜み、いつでも命を奪えるように身構えていました。徳川側から送られた刺客だと思われます。右近が、徳川家に反旗を翻(ひるがえ)すか豊臣方につく動きを察知した時、すぐに右近を抹殺するためだったのでしょう。いくつもの修羅場をくぐり抜けてきた右近は、その気配を敏感に感じ取っていました。右近はある神父に「金沢を出てから、いくらか安全だと思える日はわずか二日しかありませんでした」ともらしています。

家康は幕府の大義を振りかざして右近を処刑することができたはずですが、右近が人びとの前で処刑され殉教者になると、キリシタンたちの信仰が強められ、それに乗じて家康に反感を持つ豊臣の家臣たちが立ち上がるのではないかと、右近の影響力を恐れていたと考えられています。二月に金沢を出てから半年近くも次の沙汰が出されなかったのも、幕府内で意見が分かれ、まとまらなかったからだと言われています。

慶長19(1614)年9月、ついに家康は決断を下しました。「宣教師をはじめすべてを国外追放とする。ただの一人も国内に居残ることは相成らぬ」。長崎に届いた幕府の命令は、日本人の右近も神父たちと同じように、国外追放に処するという前代未聞のものでした。これまでのキリシタンの追放は、国内に限られていたのです。

それを受けて、イエズス会は長崎で管区会議を開きました。長崎のパードレと信徒たちは、家康が最後には厳しい追放の命令を撤回するだろうと考えていましたが、その願いは打ち砕かれました。長崎奉行をよく知っている、ディオゴ・デ・メスキータ神父を駿府に派遣し取り成そうとしましたが、それもかなわませんでした。

【いよいよ次回、最終回】

「カテキズムの学び」は今月号はお休みします。

訃報

タルチジオ土屋茂明神父(サレジオ修道会)は、2021年12月29日、悪性黒色腫のため大阪市内の四天王寺病院にて帰天。87歳。東京都墨田区出身。

1961年、司祭叙階。62年～85年と90年～2000年、育英工業高等専門学校（現サレジオ高専）と大阪星光学院にて奉職。85年～90年、ドン・ボスコ社『カトリック生活』編集長担当。2003年～09年、サレジオ学院幼稚園園長と鷺沼(さぎぬま)教会(横浜教区)助任として司牧。

園児から20歳を越える学生まで幅広い年齢層の人びとに丁寧な対応をし、また神のはからいに身をゆだねつつ奉仕の道を全うされた。

◆

大阪教区司祭・崔周永(チェジュヨン)神父の父、マルコ崔鐘寛(チェチョンガン)さんは2021年12月5日、老衰のため帰天した。83歳。

◆

大阪教区司祭・上田憲(けんしげあき)神父の父、ヨハネ上田重明さんは2022年1月2日、心不全のため帰天した。78歳。

『生きる』―難民移住者

読み書きは人生を護る武器になる

「難民支援」と聞くと「気の毒な人へ救援物資を配る運動」と思われがちですが、それはほんの一部に過ぎず、最も時間と労力をかけるのは「難民認定のための立証」です。その人が真に難民だと証明するために、本人から事情を聴き取り、出身国情報を集め、多くの文書を書いたり読んだりしなければなりません。この過程で私たちは当事者にも「母語でよいので自分で書いてください」とよく文書作成を求めますが、これは私たちが「読み書きできるのが前提」の社会にいるから簡単に要求してしまうのです。「書かない」のではなく「書けない」のかもしれないのに、です。

作文というのは訓練しないと書けないものであって、世界には非識字ではないが文章を書く習慣のない人は大勢います。一方で、自分の出身国の歴史や政治情勢を分析し順序だてて文書化できる人もいます。難民認定の過程において有利になるのは圧倒的に後者です。難民調査官や弁護士と対等に問答のできる能力や、人に読んでもらえる文書を作る能力は、社会の中で自分を護る武器となります。

ある難民は「日本人は小さい時からマイクの前で話すことに慣れているでしょう。でも私たちはそうでないからマイクを向けられると膝も声も震えます」と言っていました。確かに日本ではマイクを通した学校行事が日常的に行われます。

作文も、人前で話すことも、訓練するからできるのであって、私にとっての「当たり前」は訓練を受けたおかげだったのだと気づかされました。

学校では普段の授業以外に校外学習に出たり、生の文化芸能に触れたり、その道の専門家の話を聞いたりする機会が数多くあります。学校が児童生徒を未知の世界にいざなうのです。そんな学校教育を見て「日本のこどもたちが羨ましい」と言った人がいます。彼は祖国で少年兵として殺人鬼に仕立て上げられた傷を背負っていました。

全ての子どもたちに学ぶ権利を保障することがいかに大切かを私は難民から教えられました。

（文　シナピス事務局　ビスカルド篤子）

大阪教区のカトリック病院
ガラシア病院
特徴的な医療
ホスピス（緩和ケア）
リハビリ・神経内科
肝臓内科・循環器内科
医療法人ガラシア会
理事長　前田万葉 大司教
チャプレン　松本信愛 神父
〒562-8567
箕面市粟生間谷西 6-14-1
☎ 072-729-2345
医療法人ガラシア会

カトリック墓地
納骨堂・納骨所
使用者募集
大阪教区の信者の方のみがお申込みいただけます。
詳細は資料をお送りさせていただくほか、インターネットでもご覧になれます。
資料請求やお問い合わせは
教区本部事務局
管理課　竹中まで
☎ 06-6941-9705